終末のアリア

二木了平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末のアリア

【Ｎコード】

Ｎ８５０３Ｇ

【作者名】

二木了平

【あらすじ】

（※ただいま、内容の精査と大幅な改稿中。更新はしばらく中断します。申し訳ありません）

side－A　第01話

２００７年　３月２５日

かちり、かちり、かち、かち――――

時計の音が、うるさい。

そんなに毎秒毎秒律儀に働かなくたっていいじゃないか。たまには休めよ、一週間くらい。

おっかなびっくりで始まった私こと大歌樹々（キキ）の高校生活も、一年間という時を経て一段落した。来年度からは中だるみの二年生だ。今はその準備期間とも言える春休み。新学期まであと一週間ほどある。私が時計に休息を提言したのも、そういう理由からである。もっとも時計は、私の言葉など実行しようなんて気はちっともない。そんなことわかっている。私が言うのも変なんだけど、それはあくまで“時計”なのだ。

「……な～んて、一人で言葉遊びしちゃったりして、てへ♪」

不文律その１。私、大歌樹々は心ねぇの目の届かないところへは行かない。

その心ねぇはというと、昨日から家を空けている。ちょっと外せない用事ができちゃったからお留守番しててね～、なんて置き手紙を残して消えてしまった。その手紙によると一週間ほどで用事は済むらしいから、帰ってくるのは三月末あたりであろう。

明日火心、私の保護者にあたる女性。私は『心ねぇ』と読んでいるが、血縁関係は無い。

まったく、自由人といえばそれまでだが、それにしても奔放すぎる。一人寂しく家に残る私の気持ちにもなってみろっての。

昨日、それで私は頭にきて美華と一緒に心ねぇ秘蔵のワインを一本空けてしまった。なんか卵の腐ったような臭いがして、とても飲めたモノではなかったけど、そこは我慢して飲み干したのだ。おかげで今、頭はがんがんするし、視界もどこか朧(おぼろ)だ。無謀にもリキュール一気飲みに挑戦した美華は、階下で死んでいる。もちろん額には“肉”と書いてある。

「う、あ……また眠気が」

襲ってきた、と言う前に私はベッドに倒れ込んだ。どうやら私の肝臓はあまり効率的に働いてはくれないようだ。……まあいいさ。どうせ心ねぇはしばらく帰ってこない。今のこの家の主は私なのだ。つまり私が法律？　いいねぇ、その響き。あとで下で眠っている美華に言ってやろう。

不文(かこ)律その2。私、大歌樹々は五年前以前の記憶を失っている。

自己分析すると、私は活発な人間の部類だ。友達だってそれなりにいるし、社交的な性格だと思う。

でも、それらは全て作られたような感覚がしている。

自分であってどこか自分でないような、そんな感覚。それが私には怖い。だから、剥がれかけたラベルに唾をつけては張り直すようなことをずっと続けてきた。自我を防衛するために、剥がれないよう、剥がれないよう、常に気を配りながら生きてきた。そうしないと、壊れてしまいそうで――――

「ひゃっ」

ぱちんと軽い衝撃。目を開けると、美華の腕が額の上に乗っていた。

「……えっと」

いつのまにか美華が隣で寝ていた。窓の外を見る、もう薄暗くな

り始めていた。時計を確認する、時刻は午後六時半。おなか空いたな。今日は朝から何も食べていない。よくよく考えてみれば、昨日からろくなモノを食べていなかった。イカゲソ、サーモン、あたりめ、枝豆などの残骸がテーブルの上に放置してある。

私は美華を見た。額の落書きがきれいに消えていたので、一度目を覚まして洗面所にいったということだろう。美華の腕を自分の額の上から退ける。すると、美華はうっすらと目を開けた。

「あ……起こしちゃった、かな？」

「……」

美華は無言のまま半分開いた目で私の顔を見る。そして――――

「樹々ちゃ～～～～～～～～ん！！」

がば、と私に抱きついてきた。

「んなっ！」

私より体格の大きい美華をとっさに避けることなんかできなかった。なのでそのまま抱き枕状態。

「ふにふに～～～ん」

美華が私のあらぬところを触ってくる。まだ酔っているようだ。

「きゃーー！　きゃーー！」

「むっ、私より小さいくせにでっかく育ちやがって～～～」

いや酔ってない、絶対酔ってない！　明らかに確信犯だ！　しかもそのまま服の中にまで手を伸ばしてきやがった！

「ぎゃあああああああ！」

平手で美華の頬をひっぱたく。ぱあん、と快音が響いた。すると美華は素直に手を退けてくれた。

「いった～～い！　何よ、冗談の通じない子ね」

「じょ、じょ、」

「ジョジョ？」

「冗談にもほどがあるでしょう！」

切れた。

「だいたい！　何で私の隣で寝てるのよ！　あんたの寝床は下でし

ょ！」
美華はぽりぽりと頬を掻くと、にはは、と笑った。
「いやあ、だってソファー固いし寒いんだもの。いいじゃん、女同士なんだし。私、別に百合っ気はないよ？」
「……」
「ごめん、少しだけいたずらしてみたくなっちゃって。てか、樹々も私にいたずらしたでしょ？」
自分の額を指さす美華。……ああ、肉のことか。
「――――まあいいわ。今回はお互い様だから、許してあげる」
そう言い捨てると、私は布団を深くかぶりなおした。春が近いとはいえ、日が落ちてくるとまだ肌寒い。
「もう、あったまるなら、私がいるじゃん」
美華が私の布団に侵入し、再び抱きついてきた。
本日、二回目の快音が放たれた。

不文律（かたがき）その3。私、大歌樹々は現在、女子高生だ

仕方がないので、まだズキズキする頭を抱えながら押し入れの中からもう一つ毛布を引っ張り出してきて美華に渡した。いたずらしないことを条件に二人で並んで眠る。結局、私は美華にはかなわない。友達はたくさんいるけど、親友と言えるのは彼女だけかもしれない。そういえば、私の家に入ったことのあるのも美華だけだ。
望月美華（もちづきミカ）は、私のことを一番よく知っている。それは私以上に、という意味だ。つまり私が記憶を失う前からの付き合いだったというわけで、そして当然ながら私はそのことを覚えていない。私にとって美華は、高校で再会した初対面の親友ということになる。
どれだけ複雑だったであろうか。十年来の親友（と美華は言う）が記憶を失って現れたのだ。その心情は想像に難くない。もし私が美華と逆の立場だったら、おそらく、上手く接することなんかできないであろう。

でも、彼女は違った。外界がとてつもなく怖かった私に、おそらくはいつもと変わらないであろう笑顔で私に話しかけてくれたのだ。彼女にかなわないとは、つまりはそういうわけだ。

美華といると、私は安心できる。
美華といると、私は私だとわかる。
美華といると、私は笑顔でいられる。

私は目を閉じた。隣には、布団を挟んで親友（ミカ）がいる。だから今、私はぐっすりと眠れるのだ。

side－A　第01話（後書き）

新連載です。全ての労力をここに
頻繁に更新とはいきませんが
そのぶん内容を充実させていこうと思います

では、終末のアリア
開幕です――――

side－A　第02話

２００７年　３月２８日

『あ～、それね、デキャンティングすればよかったのに』

「デキャンティング？」

夕方、心ねぇから電話がかかってきた。

『そ。年代物だから、酸化防止剤に亜硫酸塩が結構使われてるわけ。でも亜硫酸塩ってのは摂取しすぎると悪酔いをおこしちゃうから、ワインを空気に触れさせて飛ばしてから飲むのよ。それがデキャンティング。樹々、まさかそのまま飲んじゃったとか？』

う、図星。ちなみにラッパで飲んだから、空気になんかちっとも触れさせていない。

『まっ、若い頃は無茶して、いろいろ学ぶといいわ』

いや、もっと別に言うことがあるだろう、と思うのだが自分のことなので口は挟まない。

「それでさ、いつごろには帰れそう？」

『う～ん、そうだね……一日には帰れそうかな』

「一日って、新学期の前日じゃん！　心ねぇ、大丈夫？」

『大丈夫よ。いざとなったら年休使うから』

いや、新年度早々年休使うって、どんな根性しているんだろう。

『そうならないために早く用事を済ませようとしてるんじゃない。……で、何か変わったことはなかった？』

いつもと同じ、お決まりの台詞。何か思い出したことはあった、とは聞かない。それは私に対するある種の配慮だ。

つまり、記憶が戻ることイコール望ましいこと、とは限らないからだ。

たとえば、私が記憶を失うきっかけになったのがとてつもない恐

怖体験だったとして、もし私が記憶を取り戻したら私はたちまちパニックに陥ってしまうだろう。記憶喪失者に対して、すべての脳医学者は記憶を取り戻すことをよしとしている。でも、記憶を失った状態でも今の生活が落ち着いたものであれば、無理に記憶を取り戻す必要なんかないのだ。

その点を心ねぇはよくわかっている。彼女は私が記憶を失ったきっかけを知るわけではないが、五年もの間思い出せないでいるなら、それには何か理由があるのだろうと考えていて、カウンセラーらしく心のケアを最優先にしてくれている。

「いいや、特には。何回か美華が遊びに来てくれたけど、それ以外はホントにな～んにも」

『そう。望月さんにはお礼を言っておかないと』

「そだね」

『……それじゃ、そろそろ切るよ』

「うん――――、じゃあね」

受話器をスタンドに置く。そのまま私はソファーに深く座り込んで上を見上げた。そして、両腕をまぶたの上へ持ってくる。

「――――ねぇ、これでも私、結構怖いんだよ」

目頭が熱くなってくる。

私は不安で、不安でたまらない。一人は、もういやなのだ。

それはおそらく、わたしの魂に刻みつけられた根源、原体験からくるものなのだろう。頭では忘れていても、身体がそれを記憶している。私は一人が怖い。

「――――あ」

涙がひとしずく、零れた。

発作だ。

「うっ、ひくっ……」

嗚咽が漏れる。
「つらい、よ」

誰でもいい。
誰か、私のそばにいて。
私を抱きしめて。
この体の震えを止めて。
お願いだから――――。

人は、長い人生の中で、一度は生まれ変わるものだ。
それは俗に“転機”と呼ばれている、今までの本質からとてつもなく変化する瞬間。

Ｒｅ：ｂｉｒｔｈ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ

私にとっての“転機”は、まさにあのときだった。私が記憶を失って、次に目が覚めた瞬間。
文字通り、私は生まれ変わっていた。
この“大歌樹々”という肉体に再生した新しい“何か”。
私はいったい誰なんだろう？
もしかしたら、なんでもない何かが勝手に“大歌樹々”という肉体を操っているだけなのではないのだろうか？
美華も、心ねぇも騙して、笑顔で、近づいていく――――
時折、そんな不安衝動が発作的に私を襲う。
アイデンティティの危機。リ：バース症候群。自己が自己でなくなるような感覚。

私は、あとどれくらいこの衝動に耐えられるのであろうか。

ｓｉｄｅ－Ａ　第０２話（後書き）

語句解説

『Ｒｅ：ｂｉｒｔｈ　ｓｙｎｄｒｏｍｅ』

記憶再生症候群。樹々の症状をまとめるために明日火がつけた造語。重度になると自我が保てなくなり、人格崩壊してしまう怖れがある。特効薬などは存在せず、カウンセリングを受けることである程度軽減できる。

side－A　第03話

不文律（やまい）その4。私、大歌樹々は、一人では生きていけない。

「――――はっ、はっ、はっ、かはっ……」

胸が、いたい。心臓を締め付けられるような感覚、不安。呼吸も正常にできない。

「ううっ……くっ、こんなんじゃ、ダメなのに――――」

自分を叱咤する。それでも、発作は収まらなかった。

心ねぇに余計な心配はかけたくない。心ねぇは、私と一緒にいるとただでさえ辛いはずだ。その上私が体調不良でこんな症状（こと）になってるなんて知られたら……いや、それは絶対に考えてはいけないことだ。

こういうときは外に出かけるのが最も有効な対策。公園にでも行って、気を紛らわせることにしよう。

人並み外れた精神感応能力。心ねぇ、いや、心理学者（カウンセラー）・明日火心はそう表現した。

つまり私は“感じやすい”ということだ。あらゆる事象に対して、精神を揺さぶられる。どこか落ち着けない、それが私の症状だ。

それの極みが前述の“リ・バース症候群”。不安定な精神の方向性が自我の崩壊につながってしまうという、明日火心曰く最悪の合併症だ。

だから私は他人（ともだち）を求める。自分を、自分という枠から零れさせないために周りを囲って覆い尽くしてしまう。

結局何の解決になっていないと理解しながらも、私はこの行為を一生続けていくしかないのだろう。

公園は、閑散としていた。
まぁ、無理もない。もう少しすれば花見客でにぎわうこの場所も、桜が咲いていなければただの寂しい広場だ。
私は川沿いのベンチへ腰掛ける。斜め上を向いて、目を細めた。桜は、蕾が少しふくらんだ程度のものが多く、ちらほらと咲いているものもあるが、やはり満開にはほど遠い。

「隣、いいかな？」

唐突に声をかけられた。閉じかけた目を開いて、横をみる。その人は私の返事も待たずに空いていた私の隣に座った。
「ちょっと疲れちゃってね、いや、別に他意はないんだよ？」
わけのわからない言い訳をしながら笑った。
「……くすっ」
「え？」
その人は少し驚いたようだ。柔和な表情、ほどよく伸ばした髪、清潔感溢れる服装。女っぽいけど、胸はないし、多分男なのだろうが、そんなことはどうでもよかった。

だいぶ、落ち着いた。

「ふふっ、ありがとうございます」
「えっと、なんだかよくわからないけど光栄です」
「近所の方ではありませんね？」
その人は私の推理に少し驚いたようだ？
「どうして？」
「なんとなく、です。身に纏った空気というか雰囲気というか、なんだか懐かしい、田舎っぽいかんじですから」

「――――ああ、なるほど」
その人は一人うなずいて納得している。
「そうだね。確かに僕は都会に合う人間じゃない」
少しだけ自虐気味にそう言って、私を見た。
「そして君もどこか浮いているような気がするけど、それは間違いだったかな？」
あ、見抜かれている。
「正解です。まぁ、そもそもこんなところに一人、ベンチに座っているような女の子が普通なわけないじゃないですか」
私は大きく深呼吸をする。
「ありがとう、だいぶ落ち着きました」
私は弾けるようにベンチから立ち上がって、くるっと彼の方を向いた。
「では、またどこかで会いましょう」
「……そうだね、また、いつかどこかで」
私は家に向けて歩き出した。

side－A　第04話

２００７年４月２日

平日の目覚めは決まっていつも六時。朝食の準備は私の仕事であるからだ。

心ねぇは朝が弱い。おまけに一昨日(おととい)まで用事でどこかに出かけていたのだ、その疲労は相当なものになっているだろう。

まぁいつも心ねぇは出勤に間に合うぎりぎりまで寝ている。結局いつもと変わらない大歌家の朝事情なのだ

「ふぁ、いい匂い。お、おふぁ～よう」

あくびをしながら朝の挨拶をする心ねぇ。髪はパサパサで、目の下にはクマ。これが化粧で見事に変身してしまうのだから、大人の女性ってわからない。

「おはよう。今日もぎりぎり、なんか凄いね」

コーヒーを手渡す。ヤケドしないように温度は抑えてある。

「う～ん、まだ寝足りないんだけど、学校休むわけにはいかないしなぁ……」

「そう思うならほら、さっさと朝ごはん食べちゃって。私、今日はちょっと早く学校に行くから」

心ねぇは焼きたての食パンにイチゴジャムを塗りながら、うい、と生返事をする。

「樹々」

「何、心ねぇ？」

心ねぇはコーヒーを持ったまま右手の小指をぴっと立てて

「彼氏？」

と私に聞いた。

「違います」

「なーんだぁ、つまんないの。いいネタになると思ったのに。おぅ、

行け行け」
「はい、行ってきます。心ねぇも遅刻しないようにね」
玄関で靴を履き、鏡で制服のチェックをする。そして、その隣に目を向ける。
私の習慣の一つ、靴箱の上の、写真立てに飾ってある一枚の写真。
「行ってきます。真にぃ」

不文律(かぞく)その5。私、大歌樹々には、兄が一人いた。

私が五年前以前の記憶を失っているのは確かだ。だけど、私には兄がいた、という記憶だけは残っていた。
名を大歌真一(おおうたシンイチ)という。
すでに、この世の人ではない。

「あ、ああ、あ～～～～～～～～～～～～～～～～」
ばたばたばた、どすん。背中に重い衝撃。
「きっき～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」
「やかましいわ！」
ごん、とカバンで脳天に天誅。振り向かなくてもわかる、もう慣れた。
「いった～い！」
わかってるくせに、彼女はそれを避けようとはしない。殴られれば抱きついてもいいと考えているのだ。
というわけで背後から抱きつかれる。私の右肩にあごを乗せ、耳たぶに息を吹きかけられた。
うん、見る限りレズっぽいけど、幼少時代をフランスで過ごした彼女にとってはこれが普通なのだそうだ。
「美華、ちょっと！　みんな見てるよ……」
「ふぇ？」
同級生達はいつものことだとスルーしてくれているが、新入生は

興味津々で私たちのことを見ている。
「あ、そうか。今日から一年生が入学してくるんだったね」
そう言いつつ、さらに強く抱きしめられた。
「美～華～？」
「……あ、樹々ちゃんが、今まで見せたこと無いような怖い顔で美華を威嚇してるのでやめます」
後半ほとんど棒読みになりながら、美華は私から離れた。
「それにしても新学期かぁ。同じクラスになれるといいね」
「そうね、また一から友達作るのも面倒だし」
仮に美華と別のクラスになったとしても、大して変わらないだろう。どうせ昼休みになるたびに美華はやってくるのだろうから。
「え～、いやだよ～。樹々と同じクラスがいい～～～～」
「ああもう、鬱陶しいな！」

と、そのとき、どん、と再び背中に衝撃。

「うわっ！」
小さな声を出してどさっと誰かが尻餅をつく音が聞こえた。
「あ」
後ろ、男の子が一人、私を見上げていた。
「えっと、大丈夫？」
美華と話しているうちに歩くスピードが遅くなっていたようだ。ずいぶんと邪魔になっていたらしい。
私はその子に手を伸ばした。
「あいたた……あっ！　えっと、大丈夫です」
その子は弾けるように立ち上がると、制服についたほこりを払った。綺麗な制服だ。おそらく一年生なのだろう。
その子は、右目に白い眼帯をしていた。私と目が合う。
「すみません。ちょっとぼーっとしちゃいまして……」
「ほんとにごめんね～。この子、鬱陶しくて」

美華が言う。
「なっ……！　ほとんどあんたのせいでしょ！」
「あの、いえ、その……」
その子はずいぶんと落ち着かないでいる様子だった。
「あっ、ごめんね。怪我はなかった？　私は二年の大歌樹々っていうんだけど。一年生だよね？」
「はい、えと、陸奥（むつ）、由風（ヨシカゼ）です」
うわ、なんかすごく古風な名前。
「じゃあじゃあ、よっしーだね。あっ、私は望月美華。樹々と同じ二年生だよ」
「樹々先輩に、美華先輩、ですか。あの、なんかすみませんでした……」
由風は丸くなっている。やば……ちょっと可愛い小動物系。美華は顔を真っ赤にして必死で笑いをこらえている。
「よ、よーし。急ぐぞ！」
私は美華の手を引いて、校門へ向かって駆けだした。
「またね～、よっしー！」
脱兎のごとくその場を離脱した。

side－A　第05話

朝のホームルーム前。クラス掲示。
結果から言うと、私は今年も美華と同じクラスになった。
というかクラスの面々はほとんど変わっていない。
よく考えると、私のクラスは唯一の理系クラスだったから、文転理転した人以外は同じクラスになるのが当たり前なのだ。
「やったぁ！　また樹々と同じクラスだ！」
美華は一瞬で自分と私の名前を見つけると、抱きついてきた。
「ああ、そうだね、つーか離れろ鬱陶しい」
あと、暑苦しい。美華は私より平均体温が高いのだ。冬でもぽかぽか、冷え性とは無縁の体をしている。
ちなみに私の平均体温は低い。夏でも冷え性になってしまうくらいだ。
「ほら、早く教室に行こうよ。ホームルーム始まっちゃうよ」
美華を引きずりながら私は新しいクラスへと向かった。

昼休み。

「ねぇ、あの男の子、今朝通学路で見た子じゃない？」
「うわ、ほんとだ。てか何やってるの」
「女の子に喧嘩ふっかけてるなんて、サイテー」
「いや、俺最初から見てたけど、女が先にふっかけたぜ」
「えー、まじー」

なんだかクラスが騒がしい。観衆につられて私も外を見る。する

と、そこには女の子と男の子が向かい合って何かを話していた。
穏やかじゃない。どうやら喧嘩をしているようだった。
「――――ん？」
その男の子、右目に眼帯をつけている。ってことは。
「由風くん？　ねぇ、ちょっと美華！」
名前を呼ばれてとことこと私のところへ歩いてくる。
「なぁに？」
「あれさ、今朝の男の子じゃない」
美華は私が指さす方をみた。
「あ、ほんと、よっしーじゃん。何してるんだろ。行ってみる？
私たち先輩だし、知り合いだし」
珍しく美華がまともな提案をした。うん、その案には私も賛成だ。

階段を駆け下りて上履きのまま校舎を出る。二人が言い争っているのは中庭だ。
「由風くん！」
「よっし〜！」
由風は私たちに気づいたようで、少しだけばつの悪そうな顔をした。
「樹々先輩、美華先輩……」
「何してるの？」
私がそう聞くと
「――――卑怯。先輩方に助けてもらうなんて、あなた、それでも男なの？」
冷たい声でそう言い放ったのは、由風と相対していた女の子。
つん、とそっぽを向き、興ざめとでもいわんばかりの態度で校舎の中に消えていった。
私はその後ろ姿を見送ると、由風に話しかけた。

「えっと、改めて聞くけど、どうしたの」
すると、由風は自分の右目、眼帯に手をあてた。
「これが、鬱陶しいそうです」
「「は？」」
私と美華、見事に返事が被ってしまった。
「ですから、この眼帯が鬱陶しいのでどうにかしてくれ、そう言われました」
由風は悲しそうな顔をしている。
「あのさあのさ、とりあえず中に戻ろうよ」
美華は、こういうとき本当に周りがよく見えている。学校のありとあらゆる窓からは野次馬達が興味津々で私たちのことを見下ろしていた。
「保健室行こう。ね、そうしようよ樹々」
「……そうだね。行こう、由風くん」
私は彼の手を引いて、校舎の中へ戻った。

「んで、私のとこに連れてきたわけだ……」
保健室、心ねぇの職場だ。言い忘れてたけど、明日火心は私たちの学校の保険医兼カウンセラーである。
「うん……えっと、邪魔だったかな？」
「いいや。それが私の仕事だし――――でも」
心ねぇは私と美華を一瞥する。
「陸奥くんは預かるけど、君たち二人はさっさと戻りなさいな。授業でしょ？」
結局、心ねぇの圧力で保健室を後にした。

side－A　第06話

放課後。
買い物をして帰ろうと思い、商店街に来ていた。
家事はほぼ１００％私の仕事であるので、炊事洗濯買物だって私の仕事だ。……うん、遊びたい盛りの高校生にしては良くやっている方だと思う。

五年前、一度だけ心ねぇと一緒にこの商店街を歩いたことがある。
不思議なものだ。
私には記憶がないのに、この街の地理はしっかりと把握していた。体が覚えていた、とでもいうべきだろうか。どこにどんなお店があって何が売ってあるか、当時心ねぇに案内されながら言い当てて、彼女を驚かせたものだ。
赤子同様と思われていた私の知識も、あまり失われていなかった。心ねぇが言うには、私からは“思い出”の部分だけが失われてしまったようである。だから美華やその他の友人のことは覚えていなくても、自転車の乗り方は覚えていたのだ。

八百屋のおじさんはいつもまけてくれる。魚屋さんも、肉屋さんも、みんな優しい。
でも、覚えていない。
そういえばちょっと疑問もある。体に残った感覚を頼りにしているのだから、私は以前から頻繁にこの場所を訪れていたはずである。だが、記憶が戻った当初、商店街の人は私のことを全く知らなかったのだ。
「よっ、樹々ちゃん！」
声をかけてきたのは花屋で働く若い青年。奇しくも五年前に突如この街に現れ、今は住み込みでこの花屋で働いている。商店街一謎

の人物だが、人当たりのいい外見と温厚な性格で商店街の人たちから温かく迎えられている。
「今日から新学期だっけ？　私立は始まるの早いからねぇ」
そういいながら、ちょちょっと花束を作る。ワンコイン花束、と命名されている売れ筋の商品だ。ちなみに発案者は青年で、これ一つで青色吐息だった花屋の経営を好転させた。
「はい、プレゼント」
ぽん、と花束を渡された。
「……いいんですか？」
「構わないよ。花屋は回転が命だからね」
手元の花束をみる。薔薇の花が満開だった。

「此の世をば　我が世とぞ思ふ　望月の　かけたることも　無しと思へば――――」

「――えっ？」
「栄華を誇るものは、いつか滅びる運命にある。永遠に続いていくものはない。その薔薇の花も同じさ。満開の花は、あとは散るだけだよ」
この人は時々、意味不明なことを口走る。
「ふむ、つまりぼくが言いたいのはだね、その薔薇は、あとは散るだけだからお客さんに売れないってことだよ」
青年曰く、もっとも売れるのは八分～九分咲きの花だという。

「あ、そうだ」
お礼を言って帰ろうとした私を呼びとめて
「明日火さんによろしく言っといてね！」
なんて言いながら私に向けてぶんぶん手を振っていた。

side－A　第07話（前書き）

雰囲気がガラッと変わります

side－A　第07話

２００７年４月１０日

――――かは

呼吸が苦しい。興奮しすぎて、上手く息ができない。
やっと、たどり着いた。この町に、オレの目的がある。――――
落ち着け、急いては事を仕損じる。まずは、確実に隠れられる寝床を探そう。大丈夫、目的は逃げたりしないから――――。

“この世界は夢か現（ゆめうつつ）か。そう問われれば、私は夢だと答える。なぜなら私にはこの世に確かに生きているという“実感”がないからだ。
――――ならば、私はいかにして形成されたのか。夢でも現でも生きていけない私は、天使という役割を与えられた私は、大切な人の命を奪ってしまった私は、どこから生まれ、どこへ行くというのか”

「過労だね」
心ねぇはそう言って体温計をしまった。私は現在、保健室のベッドに横たわっている。授業中、突然倒れてしまったのだ。
「過労、ねえ……。私、疲れるようなことしたかなぁ？」
「まあ、日頃の何でもない疲れが溜まっていたんだろうね。ほら、塵も積もれば何とやら、さ。今はゆっくり休むといいよ。ほら、これ飲んで」

樹々にホットミルクを渡す。
「――――樹々、最近、何かの夢を見た？」
「夢？」
私は体を起して心ねぇの方を向いた。
「そう、夢だ」
心ねぇは窓の外を見た。その姿がひどく「　　」に似ていて、私は。
「そういえば、近頃は見てない」
そう私が言うと、心ねぇは、ふぅ、とため息をついて続けた。
「疲れているんだな、悪い……私がもっとしっかりしていれば」
「やめてよ、心ねぇらしくない」
本当に、彼女らしくない。
「――――ふふ、確かに私らしくない。すまん、ちょっと神経質になってた」
心ねぇは私のほうを向く。
「この際だから、はっきりと言っておくよ樹々。あんたの記憶のことだ」
心ねぇは真面目とも不真面目ともとれない微妙な顔で私を正面から見据えた。
「……記憶というものは、自分を自分たらしめているものを確認する唯一の手段だ。世の中には、毎日昼に起きたことを夜には全て忘れてしまうという輩もいる。
現在の樹々を樹々たらしめているものは、過去五年間の“記憶”と肉体に刻まれた“習慣”だけだ。それはひどく不安定なもののはずだが、不思議なことに今の樹々はとても安定している。
けれども、もし樹々がそれ以前の、失われてしまった記憶を取り戻したいと思い、実際に取り戻したとき、樹々の価値観は大きく変わるかもしれない。それは存在の変化とも言い換えられる。
考えてみろ。五年の記憶と、それ以前の樹々の根源たる十年の記憶――――どちらがより強いかは、一目瞭然だ」

彼女は、そこで大きく息を吐いた。
「それでも、樹々が望むのなら、きっと記憶は戻ると思うよ。焦る必要はない。時間をかけて、ゆっくりでいいんだからね」
「うん――――ありがと」
私は眠りにつくため、再び目を閉じた。

「ふーん、それで蒼の勝手な行動を許しちゃったんだぁ」
暗闇の中、その魅惑的な声が響いた。
「我らは三人で一つ。まさかそれを忘れたわけではあるまいに……」
もう一つ、厳(おごそ)かな声が響く。
二つの人影の前に跪いていた男が答えた。
「はい、それは蒼殿も重々承知のはずでございます」
「要するに我慢できなくなったってことでしょ？　私たちと違って蒼はもう限界まで達してたってことだよ」
まるで他人事のように、けらけらと笑う。
「だが放っておくわけにもいくまい。蒼の崩壊はいずれ我々にも到達する。その前に、我らの天使を――」
そうして、彼らは行動を開始した。

帰り道。深くフードを被った全身黒づくめの人物に遭遇した。
そいつはナイフをちらつかせながら、見知らぬ名前を問うてくる。
知らない、私はそんなひと知らない、そう言ったけど、無駄だった。
たとえ私にその名前の心当たりがあったとしても、この未来だけは避けられない。

絶対的な、死。こいつは、最悪だ。もうまともに直視すらできないほど、殺意を振りまいている。
人生には、生きる上で避けて通ることができない関門がいくつかある。その一つが生であり、死だ。まさに今、私は人生で最後の関門を目の前にしている。
……ははっ、私はこんなにも詩的な人間だったのか。でも――――
「私は、まだ、死に……たく、ない――――」
その願いを、そいつは、笑って、否定した。
朱く熟れた石榴のように、私の心臓は音もなく弾けた。

side－A　第08話（前書き）

ちょっと、モラトリアム

side－A　第08話

２００７年４月１３日

本来の自分に戻ろうとしている。過去と現在の同化が、思った以上のスピードで進行している。……いや、過去の私なんか知らない。だって私は過去を亡くしている。記憶の扉に鍵を掛けて、もう二度と思い出さないと封印した。だって……だって？

そもそも何故私はそんなことをした？

この記憶には何が隠されている？　開けたい。けれど開けてしまえばそこで終わり。矛盾と悪意を孕んだパンドラの箱。

……葛藤はひとまずここで、モラトリアムとしておこう。ほら、呼んでいる。すぐに、私は目覚めなくては。

「樹々」

「ふぇ？」

「何、ぼーっとしてるの。最近何か調子悪そうだよ」

美華の声で我に帰った。今日は金曜日。一週間分の疲れがたまっているのだ。

「次は移動教室だけど、その前に保健室に寄ってく？」

「ううん、大丈夫――――あれ、」

そう言いかけて立ち上がった、しかし、その瞬間、世界が暗転した。

「初めまして、天使さま」

目の前には、黒い衣服を纏った酷くやつれた男が一人。でも、そ

の双瞳は青い浄眼、爛々と光っている。
「あなたは……？」
すると、その男は跪き、頭を垂れた。
「■■■■と申します」
「――――え、今、なんて」
「……そうですか、ではまだ貴方様は――――本日はここまでです。また、次の機会に拝謁を」

目を開けると、白い天井が見えた。……ああ、また倒れたんだな、わたし。
「あら、起きた？　ってどうしたの」
「え――――？」
気付けば、わたしは泣いていた。でも、何故だろう。わたしは何を思って涙を流したのか。
「……寝る」
布団を深く被り直して、わたしの意識は落ちていった。

それから私が目覚めたのは、放課後の日も傾いた頃だった。
体調はもう問題ない。私はベッドから起き上がって軽く背伸びをする。仕切りのカーテンを開けるが、心ねぇの姿はなかった。
「……職員室かな」
机の上には心ねぇのカバンが置いてある。帰ったというわけではないようだ。
そのとき、保健室の扉が開いた。
「あ、樹々先輩、起きたんですね」
「由風くん？」
陸奥由風が入ってきた。相変わらずの眼帯姿だ。
「明日火先生に、保健室にいるよう頼まれたんです。三十分ほど席

を外すからって」
「そうなんだ。ごめんね、迷惑かけちゃって」
「いえ。先輩にはこの間助けてもらいましたし」
校庭での一件か。
「あれからどう？　あの子は」
すると由風は苦笑いをしながら
「えと、無視、です。話しかけても反応してくれなくなりました」
由風は少し悲しそうである。
「眼帯がどうのこうのって言ってたけど……」
その私の問いに、由風は少しだけ思案すると、おもむろにその眼帯を外して右目を開けた。
「僕の瞳の色が見えます？　色が、左目と違うでしょう」
私は近づいて見る。確かに、左の瞳の色は黒なのだが、眼帯で隠されていた右の瞳は真っ赤に染まっていた。
「アルビノって知ってますか？」
「アルビノ？」
「はい。色素欠乏症、という方がわかりやすいでしょうか。僕の場合、それが右目の虹彩だけに表れているんです」
由風は再び眼帯で右目を覆った。
「僕の右目は、本来なら捉える事のない波長の光もすべて通過させてしまいます。ですからＵＶカットを施したこの眼帯をして保護しているんです」
「じゃあ目の色が赤いのは――――」
「眼球の奥に流れる血液の色です。すみません、気味の悪い話をしてしまいました」
「そんなことは、ないけど……」
「明日火先生を呼んできますね。先輩はここで待っていてください。実は先輩を保健室から出さないように言われているんです」
にこっと笑うと、由風は保健室を出ていった。

side－A　第09話

２００７年４月１４日

「私は、綺麗だと思うんだけどな……でも由風くんはその眼をあまり好きじゃないみたい」
「ふ～ん、アルビノ、ね」
「美華、あんた知ってるの？」
「症状だけなら。実際の患者に出会ったことはないけどね～」
今日は土曜日だ。休日ということで美華と二人、喫茶店でだべっている。
「アルビノ。別名白皮症、色素欠乏症、白子症など。メラニンの生合成に係わる遺伝情報の欠損により、メラニンが欠乏する遺伝子疾患、ならびにその症状を伴う個体。
よっしーの場合は眼白皮症だね。髪や皮膚の色には影響がない、超局部的な症状。アルビノ患者の最大の敵は紫外線だから、ＵＶカットの眼帯なんだね。サングラスじゃ完全に防げないし」
私には美華の言っていることの半分も理解できなかった。
つぅーっと、水滴のついたグラスの表面を撫でる。指先がひんやりと気持ちいい。
「にしても」
その水滴を舐めとって、美華に視線を戻す。
「やけに詳しいわね」
「かじった程度の知識だよ。こんなの知ってたって、何の役にも立たない」
それを役立てられるのは、治療を施すことができる人々だけだ。
たとえば、心ねぇのような人。
「そういえばあんたのお父さん、お医者さんだったっけ」
「ん、話したことあったかな？」

「いや、何回かお世話になったから」
心ねぇと美華のお父さんは仕事上の付き合いがある。詳しいことは知らない。
美華は不自然にアイスコーヒーの氷をストローでくるくると回している。それで、彼女に父親の話は禁忌（タブー）だったことを思い出した。
「――――ごめん、忘れてた」
「大丈夫だよ～。もう高校生だし、私は忘れたし、樹々は覚えてないしね」
「……うん」
「もーまんたいもーまんたい」
明るく振る舞う美華。
でもその笑顔の裏には暗い過去があったことを私は知っている。
美華の現在の人格形成は、ある意味反面的なところが存在する。
反抗、とも言い換えられるだろうか。詳しいことは私にもわからないけど、とにかく、そういうことだ。

喫茶店にいたのは、二時間ほどだろうか。そろそろ店員の視線が痛くなってくる頃合いだ。
アイスコーヒー一杯で二時間は、さすがに限界だろう。私は美華にアイコンタクトを送る。美華はそういうところで無頓着な性格をしているため、いつも私から合図を出す。客でいさえすればいつまでも店内にとどまっても構わないと思っているようだ。
店をでる。喫茶店内が薄暗かったせいか、太陽が沈みかけていることに気付かなかった。
美華と駅で別れる。

普段なら自転車で移動するのだが、今日は短めのスカートをはいているため徒歩だ。
春とはいえ、日没は早い。歩き始めてしばらくすると、すっかり日も暮れてしまった。

――――――――見つけた

その瞬間、周囲が、一気に暗くなる。
いや、日が暮れているのだから暗いのは当たり前なのだが、そういうことではない。
大気が、熱を失った。
「え？　ええっ、なに……？」
どんなに鈍感な人でもこの急激な異変には気づくだろう。だが、その異変に気づいているのは自分だけだった。
激しいとまではいかないもののそれなりに往来のある道の真ん中で、私は突っ立っていた。
周囲の人間は、そんなの意にも介さないようにして歩いている。

心臓が早鐘のように鳴る。

前方、距離にして十数メートル。
そこに、黒い何かが立っていた。

side－A　第09話（後書き）

転調、激しすぎ

side－A　第10話

「こうして直接お目にかかるのは……そうですね、初めまして、我が、天使様」
私は、そこで一瞬意識が飛んだ。すぐさま我に返って踏みとどまる。
わけが、わからない。
「いったい、何を――――っ！」
あたまが、いたい。
私は、その激痛のためしゃがみこんでしまった。

『■■■■■――――！！！』

「う……あ、ぐっ！」
何か、何かおかしい。ナニカガ、ナカニ――――。

「――――、去れ」

重厚な低い声。ちかちかする目を必死に開けて、声がする方向を見た。
私と黒い男との間に、僧衣が見えた。

「それとも痛い目をみるか？」
「――――貴様、」
黒い男は、少しだけ躊躇うと、そのまま消え去った。
「……ふう」
大気が、熱を取り戻す。頭痛はおさまっていた。
「さて、大丈夫かい？」
「あ……えっと、大丈夫みたいです」

立ち上がろうとして、ふらついた。体を支えられる。
「無理はしない方がいい。うん。送っていってあげよう。だから――」
ぴん、と私の額をはじくと、私の意識は落ちて行った。

「ぼくは、ここで死ぬ」
だが、彼女は殺させない。
「……私(わたくし)も人の子でございます。役目を終えてしまったあの子を今さらどうこうしようと思うてはおりません。ですが――」
「わかっている。あとの事は全て、明日火心に託した」
「真理の女傑にですか。ほう、貴方はなかなか賢いようだ」
「それに、約束は最後まで守らないといけないからさ」
義理、と言えばそうかもしれない。わずか三年の間だったが、それでも、守るには十分価値のある時間だった。
最後まで、涙は見せなかった。強い意志の宿った瞳で、いつまでもぼくの手を握りしめていてくれた。
彼女を残して逝くことに未練がないかと言えば嘘になる。でも、それで彼女が生き続けられるなら、ぼくは本望だ。
――視界が狭まってきた。耳の奥で微かに声が聴こえる。嗚呼、願わくば、ぼくのこれからを引き継ぐ彼女に、幸多からんことを。

樹々をベッドに寝かせて、私はリビングへ戻る。
そこには、湯呑の緑茶を両手で持ち、飲んでいる男が一人。

ところどころ継ぎ接ぎされた黒い僧衣、首には数珠が掛けられ、髪は腰まで伸びて一つにまとめられている。
相貌を見る限りは二十代前半の青年であるが、発せられるオーラはそんなものではない。
「わたしの煎れるお茶はあんまり美味しくないんだけどね」
「結構ですよ、その心使いだけで十分。それにしても――――」
男は柔和に微笑む。
「お久しぶりです、明日火心。本当に、久しぶりだ。会いたかったですよ」
「私はもう一生会いたくなかったけどね、赤目双瞳」
紅眼の高僧は湯呑をテーブルの上に置いた。
「……どうやらずいぶんと嫌われてしまったようだ」
明日火はドアの付近で立ったまま赤目に話しかける。
「でも、一応感謝くらいはしてあげるわよ、ありがと」
「どういたしまして。まぁ、当然のことをしたまでです」

「で、実際のところ何しに来たわけ？」

side－A　第１０話（後書き）

苦し紛れの更新
すみません、なんか

side－A　第11話

「用事でこの国に立ち寄ったので、ついでに旧交を温めておこうと思いましてね――――あの子が、例の子ですか？」
　赤目は窓の外を見る。
「ええ、大歌樹々よ」
「大歌――――そうですか。随分と大きくなったようですね。風の便りではもっと幼かったのですが、いやはや、時というものは案外早く進んでしまうようだ」
「不老のジジイに言われてもな、ピンとこないわよ」
　赤目双瞳。比叡山延暦寺の伝説的高僧。その齢（よわい）およそ三百。
「はは、そんなに便利な体ではないんですけどね……」
「建前はもういい、赤目。お前、いったい何をしている？　相変わらず“悪意”を振りまくようなことをやっているのか？」
「失礼な。私はただ彼らの“願い”を叶えているだけです」
「っ、お前のせいで、あの子は……！」
　拳をぐっと握りしめる。すぐにでも殴りかかりたい衝動を抑えて、明日火は話を続けた。
「私のせいだと言うのですか？　貴女だって同じことを望んだではありませんか」
　そう、あの日、私は悪魔の甘言に乗ってしまった。だから、これは私の責任でもある。
「彼女（キキ）を傷つけたのも」
　赤目は続ける。
「大歌真一を死なせてしまったのも」
　うるさい。
「すべては貴女方が望んだこと」
「やめろ……！」
　もういい。

もう、やめてくれ。頼むから。
「――――どうやら言葉が過ぎたようだ。申し訳ない。多くを語ってはいけないという大原則を失念していたよ」
まったく悪びれた様子も見せず、飄々としている。
これがこいつ、赤目双瞳。他人の願いのみを叶える、もろくて強い砂の器。私は、かつてこれに願いをかけた。
「でも、これは伝えなければならないでしょうね。アフターサービスです。私のモットーは、一度関わった事象には“関わり続ける”ですからね」
赤目はその紅眼を細めて、明日火心を見た。
「五年前、彼が死んで彼女が生きた日、すべては終わったはずでした。私も、これ以上は貴女方に関わる必要もないだろうと思っていました。ですが、その日からちょうど一年後、とある人物から願いをかけられました。――――表情が一気に強張りましたよ。頭のいい貴女には、これが何を意味するのかはおわかりですね？　そうです。貴女方の願いと同じ願いを持つものが私に接触してきたんです。すなわち――――」
精神体の製作。
明日火の心臓が早鐘のように鳴る。
「私に接触してきたものは、人間工学のスペシャリスト、つまりは“人形師”だったわけですが、何を血迷ったか、自分が人形に魂を吹き込んでみたいと言い始めた。私は彼に知識を与え、彼は実験の予備段階としてまず人間に人間の魂を定着させることを試みた。その結果は、大失敗。彼は死に、魂だけが生き残った。そして“彼ら”は肉体だけを奪って、いまも“どこか”を彷徨っている」
あたりが静寂に包まれる。それを作るのは赤目であり、破るのもまた赤目であった。
「同様の魂は、同様の魂に惹かれる。なんせ、どちらも私が与えた知識ですからね。ほとんど兄弟姉妹みたいなものでしょう、彼らにとっては」

だから、探し出すのも容易い。そう赤目は言った。明日火は黙ったままだった。

赤目は、ふぅとため息をつくと、席を立った。

「お茶、ごちそうさまでした。最近はコンビニの緑茶ばっかり飲んでいましたから、久しぶりに人の淹れたお茶を飲めましたよ。感謝します、明日火心。だから、これは砂の器としてではなく、友人として警告しておきます。――彼女（キキ）から、決して目を離してはいけない」

side－A　第12話

――――そうして、彼女は博士のもとから逃げ出すことに成功したのでした

仮初めの存在から真実の存在へ。いくら真実を生み出そうが、仮初めは仮初めのままでしかない。それを彼は理解していながら、なお、その行為を続けている。

――――でも、その代償として、彼女はあらゆるものをそこに置いてきたのです

彼女はその力を、人類最強に匹敵するほどの能力を、ただ“逃げる”という事柄にだけ注いだ。そしてそれは、空前絶後の天才科学者からほんの少しだけ隙を奪い、全てを代償にして、不可能と言われた研究所からの逃亡に成功したのだ。

科学者に落ち度はない。彼女が生まれてきてから積み上げた努力が、ほんの一瞬だけ科学者を上回っただけのこと。だから、彼女の脱走はある意味必然とも言える。

――――博士はただ、遠く、海を見つめるだけだった。

……

……

…

遠い、遠い未来の現実（ゆめ）のお話。最近自分が、わからない。

心ねぇには、しばらく学校を休むように言われた。

体の調子が悪いわけではない。時々、奇妙な不快感に襲われる程

度である。
家にいても何もすることなんてない。一人で引きこもっているよりは、外の空気に触れておいた方が遥かに健康的であろうと思って、私は商店街を歩くことにした。ここなら万一気分が悪くなっても、人がたくさんいるから大丈夫、そう思った。

日の光に当てられないように、鍔広の帽子を深めにかぶっていた。お昼の商店街は主婦の買い物でにぎわっている。
なじみの店の前をいくつか通ったが、誰も私のことは気づかない。今は私服であるし、なによりみんな忙しい。
この時間帯で暇なのは、うん、花屋くらいだろう。

ガラス張りの扉を開けると、ちりん、と鐘の音がした。来客を告げる合図。しばらくすると奥から青年が現れた。
突如この町に現れた流れ者の青年。現在、花屋でアルバイト中。お金が貯まったら、また漂流する予定だという。
「やぁ、いらっしゃ――――って、樹々ちゃん？」
私は帽子を取って頭を下げた。
「はい。こんにちは」
「こんにちは。今日はどうしたのかな？　樹々ちゃんが花を買いに来るなんて珍しいこともあるもんだ」
青年は嬉しそうな顔で笑いかけてきた。学校はどうした、とは聞かない。
「いえ、花を買いに来たわけではなかったんですが……」
「――――ふむ、なるほど。ははぁん、要するに商店街で今、一番暇そうなここを訪ねてきたわけだ。暇つぶしに、ね」
どうやら、お見通しのようだ。
「いいよ。上がっていきな。お茶くらいしかないけど、それでいいならね」
「はい、おじゃまします」

青年の部屋は一階の隅にあった。広さは六畳くらい。隅にたたんで置かれた布団と小さなちゃぶ台があるだけ。本当にここはただ眠るだけの部屋であるようだ。入り口の扉の向かい側に窓があり、そこから表が見える。風通しは良さそうだ。

「あの、聞かないんですか？」

「ん、何を？」

「私が真っ昼間からこんなところにいる理由です」

「聞いてほしかったのかな？　そうしてほしいになら聞くけど」

青年は持っていた湯飲みを台の上に置いた。

「ぼくの働く花屋に顔見知りのお客さんが来た。ただそれだけだ」

再び湯飲みを持ち上げてお茶を飲む。

「……何か不安なことでもあったのかな？」

「え」

「顔に出てるよ。いや、顔というかむしろ雰囲気だな。樹々ちゃんからは負のオーラが感じられるよ」

そんなスピリチュアルなことを平気な顔で宣った。

「――――最近、私、不安定なんです」

なんとなく、深く考えもせず、そんな抽象的なことを話していた。

「ふむ。不安定、ね……それは体が？　それとも心？」

「どうでしょう。恥ずかしいのですけど、その、よくわからないんです」

そう。正直、私にもわからない。

「それじゃ、両方としておこう。朝目が覚めて、だるいのは体？　それとも心？」

「それは……」

今朝見た夢を思い出す。私が不快感に苛まれているのは、あの夢のせいなのか……？

「うん。心のほうみたいだね。最近夢見が悪いとか、まぁそんなところだろう」

私の返答を待たずに青年は答えた。
「よければその夢の内容、ぼくに教えてくれないかな？」
私はまっすぐに見つめられた彼の瞳をみた。どこまでも濁りのない透き通った瞳。
「わかりました。でも、たぶん、つまらないお話です」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8503g/

終末のアリア

2010年10月21日21時11分発行